



札幌医科大学学術機関リポジトリ *ikor*

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY INFORMATION AND KNOWLEDGE REPOSITORY

Title	保健医療総論 III における討議型グループ学習法の新たな試み・倫理的思考問題と学生のレポートをとおして見た学習効果・
Author(s)	山田, 恵子; 堀口, 雅美; 中村, 眞理子; 谷口, 圭吾; 片岡, 秋子; 片倉, 洋子; 石井, 貴男; 和泉, 比佐子; 大日向, 輝美; 武田, 秀勝; 傳野, 隆一; 松嶋, 範男; 門間, 正子; 安川, 揚子; 旗手, 俊彦; 今井, 道夫
Citation	札幌医科大学保健医療学部紀要,第 12 号: 17-26
Issue Date	2010 年
DOI	10.15114/bshs.12.17
Doc URL	http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/6356
Type	Journal Article
Additional Information	
File Information	n134491921217.pdf

- ・コンテンツの著作権は、執筆者、出版社等が有します。
- ・利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲内で行ってください。
- ・著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲を越える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。

保健医療総論IIIにおける討議型グループ学習法の新たな試み

- 倫理的思考問題と学生のレポートをとおして見た学習効果 -

山田恵子¹⁾、堀口雅美²⁾、中村真理子³⁾、谷口圭吾⁴⁾、片岡秋子²⁾、
片倉洋子²⁾、石井貴男³⁾、和泉比佐子²⁾、大日向輝美²⁾、武田秀勝⁴⁾、傳野隆一⁵⁾、
松嶋範男¹⁾、門間正子²⁾、安川揚子²⁾、旗手俊彦¹⁾、今井道夫¹⁾

¹⁾ 札幌医科大学医療人育成センター教養教育研究部門

²⁾ 札幌医科大学保健医療学部看護学科

³⁾ 札幌医科大学保健医療学部作業療法学科

⁴⁾ 札幌医科大学保健医療学部理学療法学科

⁵⁾ 札幌医科大学医療人育成センター入学者選抜企画研究部門

生命倫理の問題や情報開示などの保健医療職に求められる倫理性を理解し、保健医療職の倫理性について自己の考えを明らかにすることができる力を養うことを目標にした保健医療総論IIIが、全学科共通必須科目として3年生を対象にして行われている。平成21年度はNHKスペシャル『トリアージ 救命の優先順位』を教材として、様々な役割にたった討議型グループ学習が行われた。新しい試みとして、グループ学習に先立ち、ビデオ鑑賞の感想文、倫理的思考問題など、個人単位で参加する学習を行った。グループ学習は、司会者、被災者、被災者の家族・遺族、医師、看護師、病院職員・救急隊員・救急救命士、ボランティア・一般市民、国・地方自治体の8グループに別れて学習する役割別グループ学習(A)と、異なる役割との話し合いを行う役割混成グループ学習(B)から構成され、A→B→Aの順にグループ討議が行われた。倫理的思考問題と学生によるレポート結果の解析から、役割混成グループ学習の導入は「視野の広がり」、「相手や自分の役割の理解」を助ける上で有効な方法であることが示された。

<キーワード> グループ学習、保健医療総論III、保健医療職教育機関の学習方法、倫理教育

New approach for the group learning discussion in Health Sciences III

- Focus on the thought experiments in ethics and analysis of students' reports -

Keiko YAMADA¹⁾, Masami HORIGUCHI²⁾, Mariko NAKAMURA³⁾, Keigo TANIGUCHI⁴⁾, Akiko KATAOKA²⁾,
Yoko KATAKURA²⁾, Takao ISHII³⁾, Hisako IZUMI²⁾, Terumi OOHINATA²⁾, Hidekatsu TAKEDA⁴⁾, Ryuichi DENNO⁵⁾,
Norio MATSUSHIMA¹⁾, Masako MOMMA²⁾, Yoko YASUKAWA²⁾, Toshihiko HATATE¹⁾, Michio IMAI¹⁾

¹⁾ Department of Liberal Arts and Science, Center for Medical Education, Sapporo Medical University

²⁾ Department of Nursing, School of Health Science, Sapporo Medical University

³⁾ Department of Occupational Therapy, School of Health Science, Sapporo Medical University

⁴⁾ Department of Physical Therapy, School of Health Science, Sapporo Medical University

⁵⁾ Department of Admissions, Center for Medical Education, Sapporo Medical University

Health Sciences III is a required subject for all third year students in the School of Health Sciences. The goal of this subject is to understand the morality in the health and medical fields such as ethical concerns, disclosure and accountability, and to develop their ability to explain their opinions about such problems. In 2009, the group discussed the NHK Documentary Special, "Triage-choosing whose life to save." Before group work, students wrote their impressions of viewing the program and we conducted a thought experiment in ethics such as the Trolley problem and Plank of Carneades as a new approach. Students were divided into 8 groups of moderators, afflicted people, family of the victim, doctors, nurses, hospital staff/ambulance workers/ emergency medical technicians, volunteers/ordinary citizens, and national and local governments. Two types of group work were performed: one was role learning (A) for each other and the other was with the nine roles mixed (B). Group discussion was performed in the order of A, B and A. Analysis of a questionnaire about the thought experiments on ethics and reports written by students showed that the adoption of group work B was effective to help them develop a broader point of view and for understanding each other.

Keywords : Group work, Health sciences III, Study method for health sciences, Ethics education

Bull. Sch. Hlth. Sci. Sapporo Med. Univ. 12:17-26 (2010)

はじめに

平成12年に保健医療の総合的な教育を達成するために、3学科共通の必須科目として、保健医療総論I～IVが開講された。これら4科目は将来保健医療の分野で働くようになる学生に対し、模擬体験実習を通して今後対象となる患者や障がい者を理解する (I)、施設における実習を通して、対象者および保健医療福祉専門職との関わりを通じ、それらの機能と特性を理解する (II)、保健医療職の倫理性を培う (III)、症例へのインタビューを通してチーム医療と各職種の特長・役割を学ぶ (IV) ことを目的に学習する教科目である。保健医療総論IIIは、I、IIの学習を終了した3年次の学生を対象とした科目である。この科目の学習の特徴は視聴覚教材を使ったグループ学習¹⁾であり、視聴覚教材学習→サブグループ学習→グループ討議→合同学習の流れで行われ、グループ討議を活発にするためDV over IPによるビデオ会議システムの導入²⁾などを試みてきた。今までに、安楽死¹⁾、医療過誤^{1)、3)}、生殖医療¹⁾をめぐる問題に関する視聴覚教材を使用した学習を行ってきた。保健医療総論IIIにおけるグループ学習は、学生が一定の理解をして行く上で有効な方法であった³⁾。

平成21年度に担当教員の大幅な入れ替えを機に、6年間に渡って行われてきたグループ学習の方法や教材に対する見直しが行われた。グループ学習は学習形態のひとつであり、グループワークとも呼ばれ、講義等の一斉学習と個人で行う個別学習の間に位置すると定義されている方法であり、教育学、社会学、心理学などの多様な学問領域が使用する用語である⁴⁾。グループ学習は様々な分野で行われており、学習者間、教員・学習者間の意見交換や相互の協力、連携などにより生じる相互行為を活用する授業形態である⁵⁾。そのため、学生が受動的になりがちな講義とは異なる学習効果があることが、医療系の教育分野においても報告されている⁶⁻⁸⁾。一方で、学習効果がグループ編成⁹⁾やグループ学習を支援する教員の教授活動¹⁰⁾などにより影響を受けることが指摘されている。以上を踏まえ、今回の見直しではグループ学習の中で、学生自身の考えをより活発に発表できる学習方法について検討を行なった。視聴覚教材としてNHKスペシャル『トリアージ-救命の優先順位』を選択し、グループ学習に入る前に、個人の考えを構築するための個人レベルでの学習を取り入れ、グループ学習では従来行われていた役割別グループ学習に加えて、役割混成グループという新たなグループ学習を導入した。その結果、従来の方法に比べてより活発な討論が行われ、また、学生のレポートからも積極的に学習に参加することができた結果が得られたので報告する。

演習内容と演習方法

演習内容

1. 教材：NHKスペシャル『トリアージ 救命の優先順位～JR福知山線事故から2年～』- 大量の負傷者にトリアージが実施された福知山線脱線事故を題材にしたドキュメンタリーの映像 (2007年4月放映)
2. 対象学生：保健医療学部に通学3年生 (全98名)
3. 目的：災害および緊急時におけるトリアージ^{脚注)}について理解を深めるとともに、これを題材にして様々な役割にたったグループ学習を行い、保健医療職、現場に居合わせた人々の災害現場での倫理観や責任について学ぶ。
4. 方法

(1) 個人のレベルでの演習参加：「保健医療職の倫理」、「医療資源の配分に関する医療倫理」の2つの講義、視聴覚教材鑑賞とそれに対する感想文の提出、「ある人を助けるために他の人を犠牲にするのはよいことか」という倫理的な思考問題であるトロッコ問題、カルネアデスの板問題に対する個人の考えの提出とした。

(2) グループ学習 (役割を持って参加)：グループは役割別グループと役割混成グループの2つからなる。役割別グループは (1) 司会者、(2) 被災者、(3) 被災者の家族・遺族、(4) 医師、(5) 看護師、(6) 病院職員・救急隊員・救急救命士、(7) ボランティア・一般市民、(8) 国・地方自治体の8つであり、各グループは12～13人で構成されている。このグループは必要に応じて、2つのサブグループに分けることができる。役割混成グループは上記8つの役割を持った者の混成グループである。グループ編成の模式図を図1に示した。

演習方法

演習全体の流れを図2に示した。

一日目：学生はオリエンテーションの後、演習内容に示した2つの講義を聴講した。その後、NHKスペシャル『トリアージ 救命の優先順位』を全員で視聴した。視聴後、A4版1枚に映像の感想を書いた。

二日目：1講目学生はトロッコ問題¹¹⁾、カルネアデスの板¹²⁾の2つの倫理的思考問題 (表1) を考えた。この2つの問題は『ある人を助けるために他の人を犠牲にすることは良いことか』という問題であり、どちらが正しいと決めることは困難な問題である。この問題の導入の目的は、「ど

脚注：人材や資源の制約が著しい災害医療において、最善の救命効果を得ることを目的に、多数の傷病者の「病気やケガの緊急度や重症度」判定して、治療や搬送の優先度を決定すること。識別救急とも言われる。1人でも多くの人命を救うため、処置を施しても救命の可能性がない傷病者の治療をあきらめるといった重い決断も迫られる。一般病院の救急外来での優先度決定も、広義のトリアージである。

こちらが正しいか」を決めることではなく、自分なりの理由を持って、「賛成」あるいは「反対」を選択できるかどうかである。設問1はトロッコ問題に関するもので、トロッコを別路線に引き込むことは賛成ですか？の質問に「1. 賛成する、2. 反対する、3. わからない」の3つの答えから1つを選び、その理由を自由記載した。設問2は自分が助かるために後からきた者を突き飛ばしたにも関わらず、罪に問われなかった判断は「1. 正しいと思う、2. 間違っていると思う、3. わからない」から1つを選択し、その理由を自由記載した。その後、自由に意見交換を行った。同様の設問をグループ学習後にも行った。2講目-6講目；役割別学習開始。役割別学習に入る前に、前日に視聴した教材の内容について、各自の意見を交換した。その後、図2に示した流れにそって、グループ学習を開始した。三日目：役割別学習の後、役割混成グループ学習を行った。このグループ学習では、司会者グループに属する学生が司会を務め、各役割の立場で意見交換を行った。役割混成グループ学習に参加した後、再び役割別グループ学習を行った。四日目：グループ学習で行われた討論をまとめ、5日目に行われる発表会に向けた準備を行った。スライドの資料つくりと発表の練習を行った。五日目：役割別グループはA、Bの2班に分かれて、発表会に参加し、全体発表を行った。

A 役割別グループ（役割別に考える）*



役割混成グループ（異なる役割との話し合い）



B

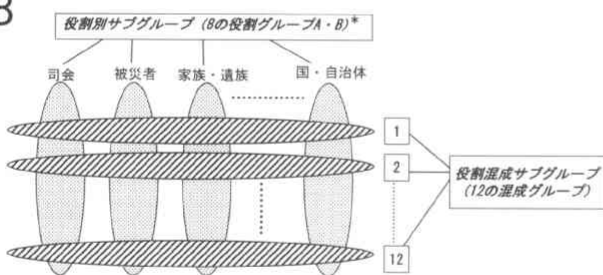


図1 グループ学習におけるグループ構成

*100人を8つのグループに分け、各グループの人数は12~13人となる。この人数は討論するには多いのでA,Bに分け、必要に応じて合同あるいは2グループに分かれて学習、討論する。最終日の発表はAグループが午前中、Bグループが午後に行なった。

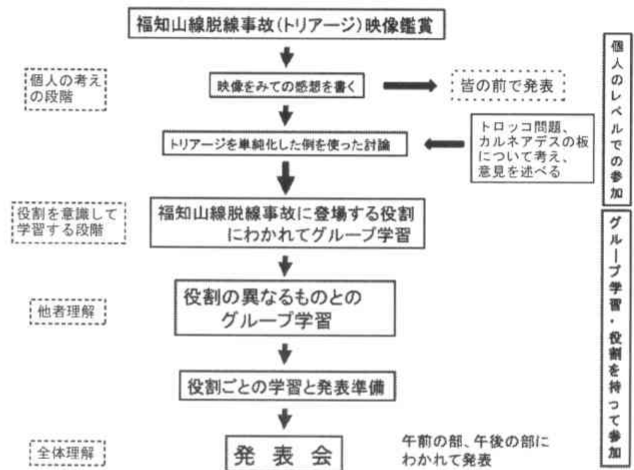


図2 保健医療総論III演習の流れ

表1 倫理的思考問題

1. トロッコ問題 (Trolley problem)

トロッコが線路に沿って走っている最中に、制御できなくなった。このままでは線路の上にいる5人がトロッコにひき殺されてしまう。そこでトロッコを別路線に引き込んで5人を助けることは可能であるが、この場合は線路に立っている別の一人がひき殺されてしまう。トロッコを別路線に引き込むべきか？

2. カルネアデスの板 (Plank of Carneades)

舞台は紀元前2世紀のギリシア。一隻の船が難破し、乗組員は全員海に投げ出された。一人の男が命からがら、一片の板切れにすがりついた。するとそこへもう一人、同じ板につかまろうとする者が現れた。しかし、二人がつかまれば板そのものが沈んでしまうと考えた男は、後から来た者を突き飛ばして水死させてしまった。その後救助された男は殺人の罪で裁判にかけられたが、罪に問われなかった。現代の日本の法律でも、刑法37条の「緊急避難」に該当する為、この男は罪に問われない。

レポート課題と評価

教員は役割別ならびに役割混成グループを分担して担当した。学生は一日ごとにグループ学習の記録を行い、提出した。発表会資料（パワーポイント）は発表会終了時に、提出した。資料はコンピューター実習室PCの共通フォルダに保存され、学生は必要に応じてファイルを見る事が出来た。

演習終了後、学生は先に述べたビデオ視聴に対する感想文、倫理的思考問題に関するレポートに加えて、演習全体に対するレポートを提出した。レポートの内容は（1）役割別グループ学習で学んだことの概要と感想、（2）役割混成グループ学習で学んだことの概要と感想、（3）最終日に他のグループの発表を聞いて学んだことの概要と感想、（4）演習全体に関する感想、（5）「トリアージ」について考えたこと（「トリアージ」の持つ意味、保健医療職に求められる倫理、保健医療に関わる課題など）である。

出席状況、討論における参加態度や発言の状況、資料作成や発表準備に対する積極性、提出物を基に、評価表に従って、役割別グループ担当教員が行った。

分析方法

この論文では、倫理的思考問題に関するレポートと演習

全体に対するレポートを分析対象とした。倫理的思考問題の分析では、「演習前」と「演習後」の2群、「トロッコ問題」と「カルネアデスの板問題」の2群、回答が変化した方向（わからない→賛成、反対と賛成、反対→わからない）の2群の比率の差の検定にはMcNemar 検定を用いた。1名の学生が「演習前」に欠席したので、解析から除外した。演習全体に対するレポートの分析では、「役割混成グループによるグループ学習を追加したことによる学習効果はどうであったか」という点に着目し、その観点に対応した記述箇所をレポートの記述のまま抜粋した。同一のレポートから複数の記述が抜粋された場合は、それぞれを独立した件数とし、抜粋された全149件の記述を分析の対象とした。それらの記述を複数の教員で検討し、類似性の点からグループ化およびネーミングをしてカテゴリー化を行った。

結 果

倫理的思考問題

「トロッコ問題」ならびに「カルネアデスの板」問題に対する実習前後の回答を表2に示した。回答はグループ学習が開始される前並びに学習後の2度に渡って行われた。トロッコ問題およびカルネアデスの板問題でそれぞれ33名(34.0%)、21名(21.6%)の学生がグループ学習の前に3の「わからない」を選択し、「わからない」を選択した学生はトロッコ問題で多かった ($p<0.05$)。学習後に3の「わからない」を選択した学生はトロッコ問題、カルネアデスの板問題でそれぞれ29名(29.9%)、23名(23.7%)であり、問題における有意の差、学習前後における有意の差は認められなかった。

次にグループ学習の前後における回答の変化を表3に示した。学習後に、トロッコ問題では32名(33%)、カルネアデスの板問題では17名(17.5%)の学生が学習前と異なる回答をし、変化した学生の割合はトロッコ問題で多かった ($p<0.05$)。学習後に賛成、反対の意見を持つ事が出来るようになったかどうかを知るために、「わからない」の選択を指標として、変化した回答の内容を調べると、トロ

表2 演習前後における倫理的思考問題の回答の変化

(1) トロッコ問題

演習	1. 賛成する	2. 反対する	3. わからない
前	45 (46.4%)	19 (19.6%)	33 (34.0%)
後	40 (41.2%)	28 (28.9%)	29 (29.9%)

(2) カルネアデスの板問題

演習	1. 正しいと思う	2.間違っていると思う	3. わからない
前	72 (74.2%)	4 (4.1%)	21 (21.6%)
後	70 (72.2%)	4 (4.1%)	23 (23.7%)

表3 倫理的思考問題における演習前後の回答の変化

トロッコ問題ならびにカルネアデスの板問題において、演習前後で回答に変化のあったもののうち、「わからない」の選択を指標として比較した

問題	演習の前後における回答			
	同じ	変化した		
		3→1または2	1または2→3	1⇔2
トロッコ問題	64 (66.0%)	16 (16.5%)	12 (12.4%)	5 (5.2%)
カルネアデスの板問題	81 (83.5%)	6 (6.2%)	9 (9.3%)	1 (1.0%)

ッコ問題では回答に変化があった32名のうち16名が「わからない」から「賛成」あるいは「反対」に変化した。カルネアデスの板問題では回答に変化のあった17名の学生のうち6名が同様の変化を示した。しかしトロッコ問題、カルネアデスの板問題共に「賛成」、「反対」の回答からそれぞれ12名、9名の学生が「わからない」に変化した。変化の傾向に有意な差は認められなかった。

演習全体に対するレポートから見た本演習方法に対する学習効果

学生が書いたレポートの中から、今回はじめて導入された「役割混成グループ学習を追加したことによる学習効果」に着目し、149件の記述を抽出した。抽出された記述から、1) 視野の広がり、2) 各役割の考え方の相違、3) 他の役割に対する理解、4) 自らの役割に対する理解、5) 全体的な感想、6) 事実の記載、7) 方法に関わることの7つのカテゴリーが抽出された(表5)。6以外の記述例を役割グループ別に表4-1~6に示した。以下、抽出されたカテゴリーに沿って学生が習得した学習内容について記す。

1. 視野の広がり(表4-1)

149件の記述のうち、このカテゴリーに関するものが41件と最も多かった。役割別にみると、家族・遺族グループで10件、被災者、看護師、国・地方自治体グループでそれぞれ6件の記述が見られた。役割混成グループ学習を通し、立場の違いにより、意見が異なることや逆に立場が異なっても、問題点や改善点については同じ意見になることに新鮮な驚きを感じ、多くの学生が視野の広がりを実感していた。また、被災者ばかりではなくトリアージを行う医療者側にも精神的な負担があることなどを知り、様々な視点に触れることの大切さを記述していた。

2. 各役割の考え方の相違(表4-2)

立場によって、重視する問題にズレがあること、重視している点が大きく異なること、黒タグに関しては医師と遺族の間で、対立とも言える考えの違いがあること等、各役割での考え方の相違にふれ、ひとつの結論を出すことの困難さを感じていた。

3. 他の役割に対する理解(表4-3)

学生は、立場が異なると考え方に大きな相違があることに気づきながらも、ひとつの問題における様々な立場の意

表4 役割混成グループ学習がもたらした学習効果
表4-1 視野の広がり

グループ名	学生の記載例
(1)司会	「医療者の役割、被災者の思いがあり、物事は一つの側面だけで判断してはいけないと気づいた」「各立場の役割を聞く事でそれぞれの考えや問題点も見えてきた」「役割ごとの話し合いでは解決しない事も、混成グループの話し合いで新たな発見があり、解決策が見出せた」「様々な立場から考えることで、視野が広がり、問題点や改善策をより明確にすることが出来た」「各々の意見を聞くことで新たな見方が生まれた」
(2)被災者	「役割混成グループでの意見交換から、役割や立場が異なると考え方やとらえ方が異なるということに気づいた」「物事に関わるすべての人がそれぞれ考え方をもち、自分の考えだけが正しい・適切であるということではない」「ある問題に直面したとき何か1つの答えを見つけるのではなく自分の視点や考え方の過程を明確にし、その物事に関わる人々の意見を聞き、あらゆる角度から問題を考えることが医療者に求められる態度ではないかと思う」「演習の中の意見交換で、たくさんの人やそれぞれの立場にたった人の考えを聞き、”仕方がない”という言葉だけではすまされない1つ1つの命の重さを感じた」「役割混成グループ学習があったことで、違う視点からの意見を聞くこともでき、さまざまな視点から被災者の立場について考えることができた」「考えることで、自分の意識の変化と医療に抱える問題点を直に感じる事ができた」
(3)家族・遺族	「各々の立場で考えると、その立場が抱える問題があり、トリアージの理念と遺族の気持ちに対立が生まれるようにすべての立場が納得できる答えはなく、どこまでも問題が広がり本当に難しい課題だと感じた」「様々な立場での意見を交流し知識を深めたことで、どの立場の人の考えも理解し柔軟に考えることができるようになるきっかけになった」「役割混成グループでの話し合いで、役割ごとに認識や考え方に違いがあり、新たな発見や気づきがあった」「遺族や家族、被災者からの意見はこれまで仕方がないことと切り捨てていた面を改めて省みることができてよかった」「トリアージに関わる立場は様々であり、それぞれによって異なるとらえ方や問題がある」「被災者の立場の考えは家族・遺族グループと同じで理解しやすかった」「役割混成グループでは、さまざまな視点からの話を聞くことができ、非常に貴重な体験ができた」「トリアージの制度において、あらゆる立場が相互に関係し合って多くの改善点などの問題が挙がってくるのだと感じた」「広域災害救急医療情報システムのことを役割混成学習でしることができた」「普段は医療サービスを提供する立場からしか物事をとらえておらず、医療サービスを受ける立場の人のことをあまり考えていないことに気づかされ、新鮮だった」
(4)医師	「役割混成グループでの話し合いで、異なる意見が聞くことができ、視野が広がった」「異なった立場の意見を聞くことで、ひとつの視点からしか捉えていなかった問題の視野が広がり、新たな問題に気づいた」「それぞれの立場で討論することで、いろんな視点から考えることができ、とても有意義であった」
(5)看護師	「役割混成グループの話し合いによって、他の役割の意見も聞き、どのように関わっていけばより多くの命を救うことができるのかを考えることができた」「医療者側と被災者側は主観的に考えてしまうため、市民など第3者と考えられる立場の人からの客観的な意見話は新鮮であり、印象に残った」「役割混成グループ学習を通し、様々な視点から考えることができた」「それぞれの立場があるからこそトリアージを取り巻く問題は解決しがたいということを改めて学んだ」「被災者、遺族グループの発表が終わった瞬間、医療者側の考え方に自分が染まっていることを実感した」「構成グループ討議を通して、指示役はボランティアが適任であるという発想をすることができた」
(6)病院職員・救急隊員・救急救命士	「役割グループ学習の途中で異なった役割の人の話し合いの内容を知り、意見交換が行えたことで、更に視野を広げることができた」
(7)ボランティア・一般市民	「様々な立場から一般市民の立場から考えただけでは思いつかないことも聞くことができ、グループ学習に生かせる良い意見を学ぶことができた」「各立場からの話し合いの内容を聞き、改めてトリアージの難しさ、必要性を知ることができた」「役割混成グループを行うことによって、決まった役割がないからこそ、災害や事件の状況に応じた対応が様々な立場から望まれているのだと感じた」「役割混成グループで意見交換があったことで、役割がないからこそ現場に応じて活動できるという考えを持つ事が出来た」
(8)国・地方自治体	「他の役割の考えがよくわかり、視野を広げられた」「役割混成グループでは、役割別グループよりも倫理的な話し合いに及んだ」「自分の役割・立場を強く意識しながら、他の立場の意見を聞き活発に議論がすすんだ」「役割混成グループの話し合いにより、様々な視点で考えることができた」「各視点から物事を考えていくということで、逆にいろいろな視点を知ることが出来た」

見を聞くことができたことを評価していた。自己の意見の主張だけではなく、他の立場に立って考え、お互いの立場を理解することの重要性、他の立場を理解することによって構築できる連携などについての記述が見られ、役割混成グループ学習が、立場による意見の違いを知り、理解して

行くことの大切さに気づく機会になっていた。

4. 自らの役割に対する理解 (表4-4)

異なる立場の意見を聞くことが、自らの役割に対する理解を深めて行く上で、重要であるとする記述が多数見られた。また、看護師グループの学生は看護師という職業から、

表4-2 各役割の考え方の相違

グループ名	学生の記載例
(1)司会	「トリアージに対して医療者や被災者といった立場によって大きく意見が異なっており理解が深まった」「違う立場であるにもかかわらず、問題点や改善点について同じ意見になることに面白さを感じた」「医療者や救命救急士と被災者やその家族・遺族の間で重視する問題にズレが大きいと気づいた」
(2)被災者	「各立場のグループが考える問題点と改善策も医療者側と被災者、家族、遺族側ではギャップがあると感じた。」「様々な立場の人の意見を聞き、被災者や家族・遺族の考えと、医療者の考えには大きなギャップがあると感じた」「被災者と医療関係者はトリアージに関して重視している点異なることを強く感じた」「医療者側は多くの命を救いたい、被災者・遺族側はひとつの命を助けて欲しいと考えており、逆の立場にあるように感じた」「精神的な面を重視してほしい被災者側の考えと医療者側の考えの間に大きなギャップがあることが話し合いで感じた」「災害現場では被災者は精神的苦痛も受けているという事実が忘れられ、被災者への働きかけについては議論されていないように感じた」「役割混成グループ学習を通して、被災者の立場はあまり重要視されないで議論がなされていると感じた」
(3)家族・遺族	「役割混成グループでの話し合いで、医師、看護師、救命救急士というトリアージを行う側からの意見が印象的だった」「役割混成グループでの学習では、遺族としての意見に対して批判的な回答が多かったが、最終日の役割別グループ発表ではどのグループも遺族の気持ちを考慮してくれている内容が含まれていたのが印象的だった」「役割混成の話し合いでは、医療者側の立場からの視点がどのグループにも含まれていたため、純粋な意見を得るのは難しかった」「家族・遺族の意見と最も対立したのは黒タグの無記名に関する医師の意見であった」
(4)医師	「役割混成グループで、トリアージに対する医師と他の立場からの意見が大きく異なることを学んだ」「役割混成グループによる話し合いで、医療者と家族、被災者の考え方のギャップについて考えさせられた」「役割混成グループでの議論を通して、医師と遺族の意見の対立を感じた」
(5)看護師	「役割によって全く違った見方をしてることに気づかされた」
(6)病院職員・救急隊員・救急救命士	「遺族だけではなく黒タグをつける医師・看護師も責任の重さからくる、精神的な負担があることを改めて痛感した」「トリアージに対するそれぞれの考えは対立していたがどれも正論であり、どこまで行っても正解などないような問題が山積みになっていると実感した」「現場は、すべての行為がまた別の役割を担っている人達へとつながっていて、ひとつをたてれば他にとってはそれが問題となってしまう状況がわかった」「他の職種に置かれたときには物事の感じ方が異なるのだということを理解した」「自分と違う他の役割の視点での意見を聞くことができ、いろいろな考えがあるのだと考え直す事ができた」「立場によってトリアージに対する思い、求められる倫理観が違うことを知った」「考える立場が異なるだけで、こんなにも意見が異なるものなのかと驚き、異なる視点から見た意見を聞くことの大切を改めて実感できた」
(7)ボランティア・一般市民	「役割混成グループでは、様々な立場によってトリアージに望むことが大きく異なるということが明らかになった」「立場が変われば考え方も変わってくると感じた」
(8)国・地方自治体	「トリアージに対して、1つの結論を出すことは難しいということがわかった」「様々な立場の視点から見たことにより、医療者以外の立場を考えることができ勉強になった」「医療倫理について医療者側の目線からしか見ないのは絶対にあってはいけないことなのだと感じた」「役割混成グループ学習で、他の職種・立場における問題はほぼ同じであるが、医療者とと、被災者・遺族の立場では重きを置く点が微妙にずれていることに気づいた」「自分の職種の視点を忘れず話し合いができたことで、意見がまとまることは少なかったが、お互いの意見を理解することが出来た」「全員が納得する考えは存在せず、改善すればそれに対して不満を持つものもいるということがよくわかった」

「治療」という視点しか持っていなかったが、「ただ側に居るだけで安心する」という被災者グループの発言から、自分で気がつかなかった看護師の役割に気づかされた」と記述していた。

5. 方法に関する記述と全体的な感想（表4-5）

方法に関する記述は表4-5に示すように少なかったが、役割別学習において司会者の立場を設定したことに対する疑問、役割別と役割混成グループ別学習の時間の配分に関するものが見られた。全体に対する感想では役割混成グループ学習を肯定的に評価する記述であった。

以上の結果から、役割混成グループ学習の導入は、「視

野の広がり」、「相手や自分の役割の理解」を助ける上で有効な方法であることが示された。

考 察

保健医療総論IIIの学習目標はバイオエシックスの問題や情報開示等、保健医療職に求められる倫理を理解し、演習を通して、保健医療職の倫理性について、自己の考えを明らかにすることである。この演習の特徴は視聴覚教材を使ったグループ学習¹⁾である。本演習で従来から行ってきたグループ学習はグループ学習と討議形式を併用したバ

表4-3 他の役割に対する理解

グループ名	学生の記載例
(1)司会	「役割混成グループ学習においてひとつの問題における様々な立場の人の意見が聞くことができた」「それぞれの役割の意見を聞くことで、他の立場に立って考えてみることの重要性に気づいた」
(2)被災者	「被災者だけでなくトリアージを行う医療者も精神的な苦しみを味わっているということに気づくことができた」「違う立場の人たちと意見を交換させることで、その立場の考え方を深く理解することができた」「事故・災害では被災者や遺族へのケアだけを考えがちであるが、医師・看護師に対するケアも深刻な問題であることがわかった」「医療を平等により多くの被災者に行えるようにするためには医師や救急などの連携、そして制度や法の整備が大切であることを改めて知り、話し合うことができた」
(3)家族・遺族	「遺族にとっては何も書かれていないタグからは何も始まらないが、医療スタッフもまた、トリアージの犠牲者であることは間違いないと感じた」「遺族は気持ちが先行してしまい、なかなか他の立場から考えることが難しいが、他の職種の人々の意見や考えを聞くことで視野を広く持てた」「トリアージそのものが医療者側にとっても精神的に大きな負担を伴うものであるということがわかった」
(4)医師	「家族、被災者のみならず救急救命士、看護師、医師にも苦しみや思いがあることを学んだ」「役割混成学習で他グループとの討論を行うことで、様々な職種や人々のトリアージに対する考えについて知った」「全ての役割の立場の人からの話合いで、連携不足、訓練の重要性また一般市民のトリアージ認知不足という問題が出た」「役割混成グループでは、看護師、家族など7グループの立場からと医師の立場とは異なる視点からの考えが聞いた」「混成グループで、国・地方自治体や、ボランティアなどの医療職ではない人々の役割や活動について知ることが出来た」
(5)看護師	「役割混成グループでは、他の役割の人たちの考えを知ることができた」「災害の場でも、連携するチーム医療の必要性を感じた」「役割混成グループの話し合いを通して他職種の役割を知ただけでなく、他の役割から考えられる問題点を知ることができた」「同じグループ内での議論より他のグループの人と議論を行うことの方がお互いの考え方を知ることができ、役割混成での活動がもっとあっても良いと感じた」
(6)病院職員・救急隊員・救急救命士	「一般市民の協力が得やすくなると、より多くの生命を救うことができるようになるのではないだろうかと考えた」「医療チームと被災者側の認識の溝を埋めることがトリアージをおこなう際に必要なのではないかと感じた」「他職種に仕事について知ることができなければ、連携はとれないという結論に至った」「ひとつの事象に対して様々な見方、考え方があることを認識し、相互に理解しあうことが大切であると感じた」「現場での押し付け合いではなく、事前に真剣に災害医療について考え、現場でそれぞれの職種が出来ることを行わなくてはならないのだなと感じた」「今後トリアージが救命において必要不可欠なものになっていく上で、お互いの気持ちを少しでも理解し、思いやりの気持ちを持つことが大切になってくると感じた」「それぞれの職種の専門性を生かし、連携することではじめてトリアージが成立するのだと感じた」「互いに理解しようという姿勢は大切にしなければならないと感じた」
(7)ボランティア・一般市民	「誰かの立場に立って物事を考えてみるとその物事に対する理解が非常に深まるなど感じた」「役割混成グループでは、異なる役割グループからの意見を聞き、自分達のグループの意見との比較ができた」
(8)国・地方自治体	「これらの意見交流が、これからの医療現場において大切になるチーム医療に繋がると感じた」「立場の異なるもの全てが災害に対して同じ苦しみを共有しているのではないかとこのように考えるようになった」「(それぞれの立場の意見の違いをすべて解決する方法を考えることは困難であるが、情報の共有などを円滑化することによって状況を改善することはできると感じた)」

ズ・セッション法¹³⁾と呼ばれているものであり、一定の成果を挙げてきた^{1~3)}。しかし、受講生が約100名と多いため、小グループの構成人数が10名を超え、積極的に討議に参加できない例も見られた。すなわち、グループリーダーに任せてしまい、消極的で参加意識の低いメンバーが出る例も見られた。これらの点を考慮し、本年度は個人単位で参加する個人学習とグループ単位で学習するグループ学習を併用した学習の方法を実行した。グループ学習に先立って個人レベルで考える学習を導入した理由は、グループ学習において、明確に自分の考えを持ち、その考えをグル

ープ学習時に発言できるための、心構えの構築にある。また、グループ学習は従来から行われていた役割別グループ学習(A)と、異なる役割との話し合いを行う役割別混成グループ学習(B)から構成され、A→B→Aの順にグループ討議が行われた。これら二つの新しく導入された方法に着目して、考察する。

個人学習にトロッコ問題とカルネアデスの板問題の二つの倫理的思考問題を導入した。この二つの問題は『ある人を助けるために他の人を犠牲にすることは良いことか』という問題であり、どちらが正しいと決めることは困難な問

表4-4 自らの役割に対する理解

グループ名	学生の記載例
(1)司会	「役割混成グループの話し合いを行ったのは初であるそうだが、私たちの考えを深めることにとっても役立ったと思われる」
(2)被災者	「被災者になりうる市民がトリアージや災害への知識を深めることで、災害時に冷静に対応でき、周囲の被災者と励まし支え合い、現場の混乱を少しでも防げるのではないかと感じた」
(3)家族・遺族	「遺族にとっては何も書かれていないタッグからは何も始まらないが、医療スタッフもまた、トリアージの犠牲者であることは間違いないと感じた」「遺族は気持ちが先行してしまい、なかなか他の立場から考えることが難しいが、他の職種の人意見や考えを聞くことで視野を広く持てた」「トリアージそのものが医療者側にとっても精神的に大きな負担を伴うものであるということがわかった」
(4)医師	「医師の立場からトリアージに向き合った時、遺族や被災者の方々には理屈では割り切れない気持ちがあるかもしれない」「自分が目指している職種と異なる職種の立場にたって考えられたことは職種に対する理解につながった」「役割別に話し合い、次に役割を混ぜて話し合うことで、より自分たちの役割について考えることができた」
(5)看護師	「役割別学習の際には、治療を優先して話し合っていたが、側にいるだけで被災者に安心感を与えられるということに気づかされた」「役割混成グループで意見や質問を各グループに持ち帰ってから話し合った内容は、より深掘りとなり、勉強になった」
(6)病院職員・救急隊員・救急救命士	「偏りがちだった役割グループでの話し合いに、他の役割グループで起こりうる考え方なども取り入れることが大切だと思った」「それぞれ担当した役割の視点から意見を出し合い、役割別グループでの話し合いよりも具体的に結論を出すことが出来た」「混成グループの話し合いを終えた後、役割別グループで再度話し合いを行うことにより、自分役割の考え方を深めることが出来た」「役割別グループ内の討議では解決困難であった問題を、別のグループの立場からみて考えることにより解決することもあった」「違った視点からの考えが聞けておもしろかったし、新たな発見があり、自分の役割を考える上でも参考になった」
(7)ボランティア・一般市民	「役割混成グループでは、役割別グループ学習では見えていなかった点にも気づき、自分たちの役割に関して理解を深めることができた」「他職種の人々のトリアージについての考えを聞き、役割別グループ学習ではトリアージを含んだ話し合いが不足していたと感じた」「様々な立場の意見を聞き、自分たちには思いつかなかった一般市民の役割があることを知った」「自分のグループの役割について思いつかなかった意見を聞くことができたので混成グループでの学習はとても効果的であったと思う」
(8)国・地方自治体	「役割別グループ学習だけでは学ぶことが出来なかったさまざまな立場からトリアージを見ることができたので、問題点をより正確に理解することができ、その問題点に対して、自分の役割グループができることへ理解を深めることができた」「様々な立場を考慮しつつ自分自身の考えを固めることが大切であると思った」「最終日の各グループの発表では役割混成の際に聞いた意見もあり、頭に内容が入りやすかった」「模擬の役割であったにもかかわらず、発言にそれなりの責任を感じた」「役割別グループでは考えられなかった視点を得ることが出来、刺激を受けてグループに持ち帰った」「他のグループの報告を聞き、自分自身が考えていたものより、さらに深い内容を聞くことができ、良い参考となった」「役割混成グループでの話し合いでは、それぞれが役割の立場に立って意見を交わすことができたが、やはり自身は実際には第三者の立場であるため、他の役割に配慮した意見が多かった」

題である。この問題の導入も、「どちらが正しいか」を決めるのではなく、自分なりの理由を持って、「賛成」あるいは「反対」を選択できるかどうかを目的とした。トロッコ問題について「わからない」を実習前に選択したものの数（33名）はカルネアデスの板問題の数（21名）に比べて多かった。33名のうち11名が両問題で「わからない」を選択していた。トロッコ問題では、多くの学生は、第三者としてトロッコを別路線に引き込むべきか否かの選択、カルネアデスの板問題では当事者である自分の命を守るための選択の可否という捉え方をして回答していたことが、レポートの自由記載から明らかとなった。この捉え方の違いが、「わからない」を選択した数の差につながったのではないかと考える。グループ学習の前後で、自分の考えを決

める事が出来ない「わからない」を選択したものの数を比較すると、グループ学習後に「わからない」を選択したものの割合は「トロッコ問題」で34.0%から29.9%、「カルネアデスの板問題」で21.6%から23.7%と変化したが、前後で有意な差は認められなかった。グループ学習したことにより、「賛成」あるいは「反対」の選択が出来るようになったかどうかを、実習前後で回答に変更があったものを対象として分析したところ、学習前後でトロッコ問題では32人（全体の33.0%）のうち16名が、カルネアデスの板問題では17名（全体の17.5%）のうち11名が「わからない」から「賛成」あるいは「反対」に変化した。この結果は学習が自身の考えの決定に貢献したと言えるが、反対に「賛成」、「反対」の回答から「わからない」に変化した数も、それぞれ

表4-5 方法に関する記述

グループ名	学生の記載例
(1)司会	「司会という立場について、学習要項に書かれた役割に対する理解ができず、司会という立場を設けたことに疑問に思った」「それぞれの立場に立って議論する事で、自らでは考えつかなかった問題点や解決方法があるのかなどが考えられた」
(4)医師	「役割混成グループと役割別グループの議論はあまり変わる所はなかったように思った」
(5)看護師	「役割別に話し合いを進めた利点はあまり感じず、最初から最後まで混成でやる方が良かったように思った」
(7)ボランティア・一般市民	「もっと役割混成グループでの話し合いの時間がほしかった」

表4-6 全般的な感想

グループ名	学生の記載例
(1)司会	「どの役割からも挙げられていた問題の視点で重なっていたのが、タッグの判定と記録や他職種との連携、心のケアである」「役割混成グループを通して感じたことは、誰も傷つけることなくトリアージをおこなうことはほぼ不可能であると感じた」「役割混成グループでそれぞれの立場からの意見や要望を聞くことができたので、とても有意義であったと思う」
(4)医師	「他職種と連携をとる事の重要性は、非日常的な災害現場だけでなく、日常的に必要ななど学ぶ貴重な機会を得た」「今回の学習を通して、他の立場の人たちの話を聞かなければ、考えが偏ってしまうと感じた」
(5)看護師	「とても新鮮で面白い学習であった」「役割混成グループ学習は、予想以上に興味深いものだった」

12名、6名存在していた。しかし、いずれにしてもグループ学習が、倫理的思考問題の回答に影響したと言えよう。

本年度導入された、役割混成グループ学習は、学生のレポートの分析から、他の役割のみならず自らの役割への理解に有効な方法であることが示された。役割混成グループは各役割1名ずつから構成されたグループであるため、役割混成グループの設立は役割別グループにおける学習にも大きな影響を与えた。すなわち、役割混成グループにおいて役割の責任を果たすためには、役割別グループ学習において、その役割を正確に理解し、考えを持っていることが要求される。そのため、各学生の討議への参加やまとめに対する姿勢が主体的かつ能動的であったことが、演習期間中ならびに演習終了後に持たれた教員反省会において、担当教員からだされている。グループ学習において、グループの構成を工夫することの重要性が明らかになったと考える。

グループ学習における学習効果に影響を与える要因として、グループ編成⁹⁾、グループ学習を支援する教員の教授活動¹⁰⁾などがあげられている。またグループを構成する人数に焦点をあてた報告¹⁴⁾も見られる。本演習では役割別グループ構成人数は12～13人となったため、A、B2つのサブグループにわけ、場合に応じて少人数での討議を可能にした。本演習では、各役割別グループに1～2名の教員を、役割混成グループには1名の教員を配置した。保健医療総論はIからIVまでを4月の同時期に一斉に行う教科目であり、保健医療学部ならびに医療人育成センター(主として保健医療学部一般教育科目を担当する教員)に属す

る教員全体で担当している。そのため、教員のバックグラウンドは様々である。担当教員の教授法により教育効果に差が出ることを可能な限り排除する目的で、演習前、演習中にコア教員による説明会並びに学習会が持たれている。

さらに、演習全体の構成も効果を上げる上で重要な要素であろう。本演習では個人単位での学習として、グループ学習に先立ち、ビデオ鑑賞に対する感想文とその発表、倫理的思考問題の回答とその回答に対する意見の発表を行った。これらの学習時には、学生は自身が担当する役割については知らされていない。本論文では、ビデオの感想文や倫理的思考問題で記述されたものに対する分析結果は示していないが、例年に比べて活発な討議がおこなわれていたことから、学生が自身の考えを表現し、自身に向き合う時間の設定は、その後のグループ学習に対して一定の効果が得られたのではないかと考える。役割別グループ学習と役割混成グループ学習の時間数のバランスについては、学生のレポートにもあるように、役割混成グループの学習の時間数の増加等、今後の検討課題である。

ま と め

「倫理」をキーワードとした保健医療総論IIIにおいて、ビデオ映像を使った役割別グループ学習に対して、グループ学習に先立つ個人学習、役割混成グループ学習の導入を行った。学習は、個人学習(ビデオ鑑賞、倫理的思考問題)→役割別グループ学習→役割混成グループ学習→役割別学習→全体発表の順序で構成され、学生のレポート分析結果

から、効果的な学習形態であることが示されたが、各学習形態のバランスの問題等も浮かび上がってきたので、今後さらなる検討をし、より良い学生参加型の授業へと展開して行きたい。

謝 辞

保健医療学総論IIIを滞りなく行うにあたって協力いただきました研究補助員の皆様、並びにレポート課題を提出下さいました学生の皆様に感謝致します。

文 献

- 1) 笠井潔、橋本伸也、山田恵子他：グループ学習の新しい方法 - 保健医療総論III - 札幌医科大学保健医療学部紀要 6 : 103-109, 2003
- 2) 笠井潔、山田恵子、大柳俊夫他：DV over IPによるビデオ会議システムを用いた学内演習の試み。札幌医科大学保健医療学部紀要 8 : 67-73, 2005
- 3) 笠井潔、山田恵子、大柳俊夫他：グループ学習を通じた3学科学生の医療事故の理解について - 平成17年度、平成18年度の保健医療総論III - 札幌医科大学保健医療学部紀要 10 : 49-58, 2007
- 4) 青木一也編：グループワーク：現代教育学事典。労働旬報社、p247,1988
- 5) 平原春好、寺崎昌男編集代表：グループ学習。教育小事典, p97 学陽書房, 2000
- 6) 伊藤登茂子：成人看護概論におけるグループ学習の効果。秋田大学医短紀要 2 : 99-108, 1994
- 7) 藤沢しげ子、金子純一郎、丸山仁司：グループ学習や学年を超えた合同学習ならびに口頭試問等の試み。理学療法ジャーナル 39 : 138-141, 2005
- 8) 木本茂成、窪田光慶、松原聡他：小児歯科学基礎実習におけるグループ学習とロールプレイの効果。保護者に対するブラッシング指導。小児歯科雑誌 43 : 631-638, 2005
- 9) 中村和代、石井知子、牧香里：グループ編成がグループ学習の参加姿勢に及ぼす影響。学習能力を考慮した編成。看護教育 46 : 232-236, 2005
- 10) 芳我ちより、舟島なをみ：学生間討議を中心としたグループ学習における救援活動の解明 - 看護基礎教育において展開される授業に焦点を当てて - 看護教育学研究 16 : 15-28, 2007
- 11) トロッコ問題。
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%88%E3%83%AD%E3%83%83%E3%82%B3%E5%95%8F%E9%A1%8C>
- 12) カルネアデスの板
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AB%E3%83%AB%E3%83%8D%E3%82%A2%E3%83%87%E3%82%>

B9%E3%81%A E%E6%9D%BF

- 13) 板谷裕子：医学教育に、求められる教育学コアスキル - 問題解決型学習とコアスキル - 家庭医療 9 : 95-105, 2002
- 14) 堤明純、石竹達也、的場恒孝：小グループ学習における適切なグループ構成人数。医学教育 31 : 71-75, 2000